

源氏物語の神々

—さまざまな形と姿をもとめて—

平成23年

10月3日(月)~23日(日)



源氏物語は さまざまな姿に てんじょう 転生する

『源氏物語』は、いまから 1000 年前、王朝の文化をたっぷり吸収して創りあげられた文学空間です。ところが、いったんこの物語ができあがってみると、その完成度、内容の充実度、文章の織りなす緻密な世界に、読者たちはたちまちにとりこになりました。そして、『源氏物語』が王朝を代表する作品、王朝そのものを体現する世界と認識され、ついに『源氏物語』自体がひとつの文化になってしまったのです。

まず、絵巻がつくられ視覚からの理解が容易になります。さらに、目で見えるものであれば、美術・工芸・芸能……とさまざまな分野に、つぎつぎに吸収されて『源氏物語』の影響を受けた作品が生まれてゆきます。一方で、物語に展開した出来事をみずから模倣し体験しようという試みも生まれたりします。私たちは、こうした「文化」という影響力になった『源氏物語』の姿を「転生」ということばでとらえることにしました。「転生」とは、生まれ変わること、「環境や生活を一変させること」（日本国語大辞典）という意味です。その、「一変」させた、さまざまな形をご覧いただきたいのです。

絵画化された『源氏物語』は、まず絵巻や画帖といった形態で親しまれ、そこから端を発して、さまざまな絵巻・絵本へと応用されたり模倣されたりしてゆきます。文芸資料研究所は「源氏物語千年紀」前後からこの大きな作品の理解のために、展覧会・講演会・シンポジウム・能楽鑑賞会など、多様なイベントをおこなってまいりました。今回の展覧会が、従来の企画の延長線上にあることは申すまでもありません。今回は、実践女子大学が所蔵する絵巻・絵本・画帖を中心に御覧いただくように企画しました。『源氏物語』を離れたところでも堪能していただけるものと確信いたします。ここに「転生」した『源氏物語』の多様性、包容力を味わい尽くしていただきたいと、つよく願いたします。



2011年10月3日

実践女子大学文芸資料研究所 所長
横井 孝

こひつぎれ 一、古筆切への転生



「古筆切」については、いままでもたびたびご紹介しました。もとは本の形だったものが、書の鑑賞用にバラバラに切断されたもの。古く貴重な資料として、評価の高いものが少なくないのが特徴です。

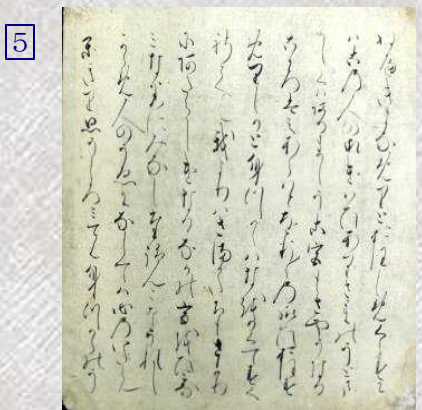
1 河内本 源氏物語・薄雲の巻 おおよつはんぎれ 大四半切 (伝藤原為家筆)

『源氏物語』薄雲の巻冒頭近くの一節の断簡。鎌倉中期写。軸装。縦 32・9 cm、横 26・3 cm。料紙は斐紙。極札等なし。右端にもと大和綴であった穴の痕跡が四つある。本文は 11 行書。句読に朱点が打たれていて、河内本の形状をなす。本文も河内本。

(国文学科研究室)

2 河内本 源氏物語・薄雲の巻 大四半切 (伝藤原為家筆)

軸装。縦 32・9 cm、横 26・2 cm。鎌倉中期写。薄雲の巻、『源氏物語大成』605 頁 3 行目～9 行目に相当する。本文は 1 の後に直接に後接する。つまり、1 の裏にあたる部分であり、もともと表裏 1 枚の紙が刎がされて 2 枚になったもの。(国文学科研究室)



3 源氏物語・帚木の巻 断簡 (伝坊門局筆)

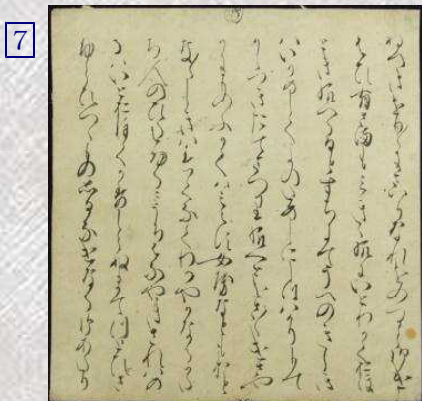
藤原俊成女・坊門局の筆と伝称する。軸装。縦 24・6 cm、横 15・3 cm。鎌倉中期写。光源氏が紀伊守邸を再訪したが、空蟬は身を隠して会おうとしない、という場面。本文は青表紙本、河内本ではない、いわゆる別本。(図書館常磐松文庫)

4 源氏物語・帚木の巻 断簡 (伝坊門局筆)

軸装。縦 17・5 cm、横 11・6 cm。鎌倉中期写。料紙は鳥の子紙。本文は 10 行書。同じく坊門局筆とする極札があるが、3 とは形態も異(本断簡は枡形)にし、筆蹟も異なる。(文芸資料研究所)

5 源氏物語・総角の巻 断簡 (伝阿仏尼筆)

軸装。縦 18・4 cm、横 16・4 cm。鎌倉中期写。料紙は鳥の子紙。本文 10 行書。阿仏尼は安嘉門院(後堀河天皇姉・邦子内親王)の女房、藤原為家の後妻。『古筆学大成』など既存の阿仏尼筆断簡とは別筆。本文はいわゆる青表紙本。(文芸資料研究所)



6 源氏物語・松風の巻 断簡 (伝冷泉為氏筆)

軸装。縦 16・4 cm、横 19・6 cm。料紙は鳥の子紙。

7 源氏物語・若菜上の巻 断簡 (伝冷泉為相筆)

軸装。縦 15・6 cm、横 14・6 cm。料紙は鳥の子紙。本文 10 行書。『古筆学大成』など既存の為相筆断簡とは別筆。本文はいわゆる青表紙本。(文芸資料研究所)



げんじ え 二、源氏絵への転生

「源氏絵」という用語は、専門的にはいろいろ議論があるようですが、ここでは簡単に『源氏物語』を絵画化したものと考えて頂きましょう。最も有名なのが徳川美術館・五島美術館所蔵の国宝「源氏物語絵巻」でしょう。それを筆頭に数多くの絵巻・絵本・画帖・屏風絵などが制作されました。ここでは、物語が画像として「転生」した例として、本学所蔵のものいくつかを選んで展示いたします。

8 土佐絵源氏物語 画帖

折本、3帖。縦34・8cm、横43・2cm。表紙、紺地に金の切箔・野毛・砂子散らし。

表紙中央に題簽あり、第1帖「きりつほ（桐壺）より／たまかつら（玉鬘）にいたる」、第2帖「はつね（初音）より／たけかは（竹河）にいたる」、第3帖「うち十てう（宇治十帖）」と墨書する。『源氏物語』各巻ごとに、14～17行の詞書と図像を交互に配した画帖。詞書料紙は下絵のある豪華本。画風は土佐派の流れを汲むとしての命名か。江戸後期写。（文芸資料研究所）



9 源氏物語色紙画帖

折本。もと2帖仕立てであったが、現在第1帖のみ伝わる。桐壺から篝火の巻まで存。縦29・0cm、横25・6cm。

『源氏物語』各巻ごとに、巻名と6～7行の本文1紙、図像1紙を交互に貼付した画帖。江戸後期写。

（文芸資料研究所）



参考展示 奈良絵本伊勢物語貼交屏風 はりませ

『伊勢物語』の絵巻・絵本の類も『源氏物語』のそれと同時並行して、多くの作品が作られました。ここでは、あえて「源氏絵」から「奈良絵本」をつなぐ絵画作品として陳列してみました。江戸中期写。（文芸資料研究所）

三、奈良絵本への転生



「奈良絵本」とは、石川透さん（慶應義塾大学教授）のこういう定義があります。——「室町時代後期から江戸時代中期にかけて作られた、彩色絵入りの絵本や絵巻」のことで、「印刷本と違い、一点一点が手作業で作られて」いる、と（『入門 奈良絵本・絵巻』思文閣出版、2010年8月刊）。

ここでは、『源氏物語』が「転生」し絵画化された作品と、奈良絵本の系脈をもつ画帖・屏風を御覧頂いたついでに、さらに「転生」飛躍をへて、本学所蔵の奈良絵本のかずかずを御覧頂きましょう。「『源氏物語』とは直接関係ないぞ」などとおっしゃらず、自由に絵本の世界を楽しんで頂きたいと思いません。ちなみに⑩『花鳥風月』は、「源氏絵」からの転生ともいえますし、奈良絵本でもある作品です。



⑩ 花鳥風月（奈良絵本）

横本2冊。縦16・0 cm、横23・4 cm。

萩原院の時代、葉室中納言の邸で扇合があった。山科少将が出した扇に描かれた人物を、在原業平とみるか光源氏とみるか、論争になった。そこで、花鳥と風月という二人の巫女姉妹に、口寄せをさせると、在原業平と光源氏が登場し、人物の正体は光源氏であるとわかる。花鳥と風月は褒美を賜った。

奈良絵本の項に掲げたが、前記「源氏絵への転生」との脈絡を考慮した配置であること、ご理解いただきたい。
(図書館常磐松文庫)





11 お伽草子（奈良絵本）

9巻、22冊。紺地草花文様等金泥下絵表紙。縦15・9cm、横22・7cm。表紙中央に朱色草花文様金泥下絵題簽を貼付。「ぶん正」2冊、「さゝやきたけ」3冊、「つき嶋」3冊、「つるのさうし」2冊、「ほうらい山」2冊、「こわたきつね」2冊、「むはかわ」1冊、「いは屋」3冊、「中将姫」3冊。料紙は間合紙（「中将姫」のみ斐紙）。袋綴。横本。一面13行。「いは屋」巻末に「いはやのさうしといふもの印本と／写本と二遍ありて文章異同あり／いつも古代の本の伝はりし／にはあらず（中略）古名を襲て後人の／偽作せるなるへし 弘賢」と墨書する。（図書館黒川文庫）

〔ぶん正〕（文正草紙）

常陸の国に住む、貧しくも正直者の文正は、塩を売って大長者となった。鹿島大明神に参詣して得た娘たち（蓮華・連）も、才色兼備の美女として成長した。求婚者は多いが、姉妹は「天皇や貴族ならばともかく、そうでなければ尼になる」と志が高い。都でその評判を聞きつけた関白殿の息子（二位中将）が、文正の館に訪れ、姉妹と恋に落ちる。中将は姉妹と結ばれ、中将の仲立ちで姉妹は入内して女御となり、文正も大納言となったという立身出世譚。

〔さゝやき竹〕

左衛門尉夫婦には、鞍馬の毘沙門に参詣して得た美しい女子がいた。良縁を願い、鞍馬の老僧正を招いて毘沙門の修法を行わせたところ、娘の美しさに迷った老僧正は、節を抜いた長い竹の筒を用意し、寝ている夫婦の枕元で「明日、娘を長櫃に入れて鞍馬に上せよ」という偽の託宣をささやいた。霊夢に従い、長櫃に入れられて鞍馬へと向かう娘。だが供の者たちは途中で祝い酒に酔い潰れてしまい、通りかかった関白が、長櫃の中の娘を発見した。実は関白は、自邸で開催した鞠の会で彼女を見初め、「毘沙門に参詣せよ」という陰陽師の占いによって、ここに訪れたのであった。

関白は長櫃から娘を連れだし、代わりに野生の黒牛を押し込める。長櫃は老僧正の許に届けられ、黒牛が大暴れをして、老僧正の悪事が露見する。一方、娘は関白の北の方となって幸せに暮らしたという破戒僧失敗譚。

〔つき嶋〕（築島）

幸若「築島」による御伽草子。平清盛は福原に港をつくるため、占いにより人柱30人を立てることになった。30人目に捕らえられたのが、一人の修行僧だった。僧は、鞍馬に祈願して授かった娘（名月）が、「丹波藤兵衛家包」と出奔したため、この世を嘆き、出家し各地を行脚していたのであ

る。父の噂を耳にした名月夫婦は、清盛に愁訴して父の身代わりを申し出る。やがて人柱を沈めるのは忍びないと、清盛の童「松王」が、一万部の法華経とともに自らが人柱に立とうと申し出て、経の島は完成した。名月は吉祥天女の、松王は大日如来の、清盛は地蔵菩薩の化身であった。

【つるのさうし】(鶴の草紙)

心優しい宰相右兵衛督は、ある日、刀と交換に鶴の命を助けた。翌日、尋ねてきた美女と結ばれ、女の灵力で豊かに暮らすことになった。しかし女に横恋慕した守護宮崎が、宰相から強奪しようとするが、女を持つ不思議な扇によって撃退されてしまう。一方、女は宰相を隠れ里に案内して、正体を明かし、形見の短冊を取り交わして飛び去る。その後、三条内大臣の姫君として転生し、形見の短冊によって宰相と再会し、二人は結ばれて幸せに暮らしたという異類婚姻譚。



【ほうらい山】(蓬萊山)

垂仁天皇時代、常世国から霊果(橘)を持ち帰ったという「たみちのまもり(田道間守)」の話をはじめ、秦の始皇帝と徐福の話、漢の武帝と西王母の話、唐代の玄宗皇帝と楊貴妃の話など、不老不死の薬があるという蓬萊山をめぐる、さまざまな逸話をあつめたもの。最後は浦島太郎の話と類似した、紀伊国名草郡にすむ「あまくものやすひこ」の話を紹介している。

【こはたきつね】(木幡狐)

山城国木幡の里に棲む雌狐きしゅ御前が、ある日、人間の男(三条大納言の御子、三位の中将)に恋をした。中将は、昔の光源氏や業平よりも勝る美男であった。女性に化けて中将と契りを結んだきしゅ御前は、やがて京五条の館で男子を出生し、中将の両親にも迎え入れられる。若君3歳の年、中将の乳母が若君に子犬を献上した。きしゅ御前はこれを恐れ、かつは煩惱を裁ち菩提へと導く因となるものであらうと覚悟して、木幡の里に戻る。一族の狐たちは御前の帰還を喜んだが、御前は世を儚んでそのまま剃髪し、嵯峨野に隠棲する。23年後、我が子を目にした御前はその栄達ぶりを喜ぶのであった。

【むはかわ】(姥皮)

尾張国岩倉の里にすむ「なるせのさへもむのきよむね(成瀬左衛門清宗)」には美しい娘がいた。しかし清宗の後添いは、この娘が気に入らない。継母のいじめに耐えきれなくなった娘が観音堂に詣でたところ、姥皮を賜り、それを被って「さゝ木の十郎たかよし(佐々木十郎高良)」の屋敷に行けとのお告げをうける。姫君は高良の屋敷で火焚き婆として雇われるが、ある晩のこと、姥皮を脱いで夜空を眺めていた姿を高良に見染められる。火焚き婆を妻にするという高良の話に、最初は仰天た両親も、姫君を見て安堵。嫁に迎え入れられ富み栄えたという観音霊験譚。

【いは屋】(岩屋)

三条堀河の中納言には美しく諸芸に秀でた姫君がいた。しかし継母は、この姫君が目障りでならない。父中納言が勅使に任命され、姫君を同行して宇佐に下ろうとした時、継母は乳母子の佐藤左衛門に姫君殺害を命じる。だが舟が明石の浦に着いた時、左衛門は姫君を盗み出しはしたものの、殺すに忍びず、海辺の岩屋に置き去りにした。姫君は海士夫婦に助けられ、岩屋で育てられる。

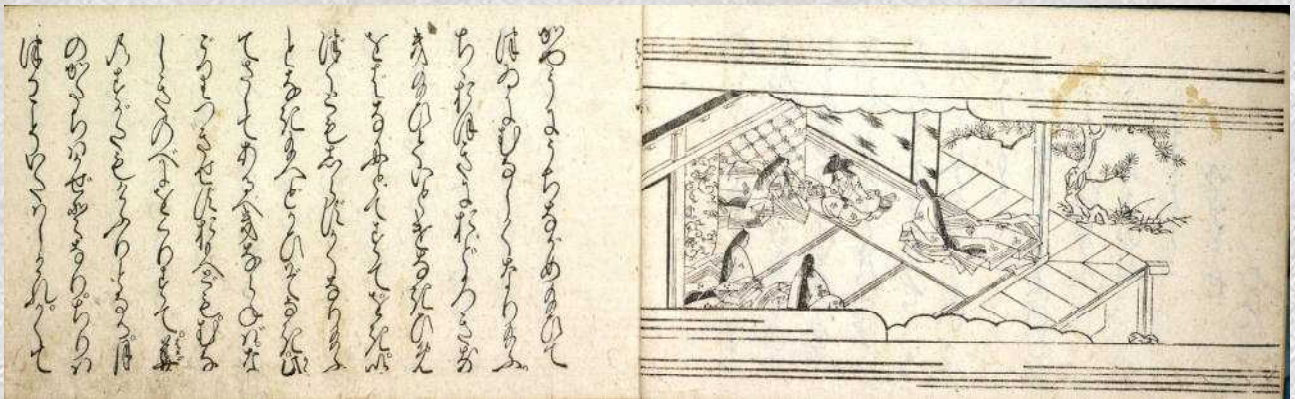
やがて関白の御子二位の中将が姫君を見つけ出し、都に連れ帰った。中将の北の方は事情を察して自ら身を引いたが、関白夫妻は海士の娘を妻とすることに猛反対し、嫁比べで物笑いにしようとする。しかし姫君の教養の深さに感心した夫妻は、姫君を嫁に迎え入れた。やがて若君・姫君が誕生し、その袴着に招待された公卿たちの中に、姫君の父中納言もいた。すべてが明らかとなり、父中納言は北の方(継母)を追い出す。海士夫婦は褒美をもらい、姫君の子供たちも出世する。

ちゅうじょうひめ
〔中将姫〕

横佩^{よこばき}右大臣豊成の娘中将姫は、13歳で立後の宣旨を賜った。しかしそれを妬んだ継母が、姫の不義を讒言し、豊成は家来に命じて姫を殺害するように命じた。しかし姫を憐れんだ家来が姫を山中に匿い、やがて豊成は姫君と再会し、都へ連れ戻す。中将姫に再び立後の宣旨が下ったが、姫は出家を望み、当麻寺^{たいまでら}で剃髪した。姫の前に如来が現れて13年後の往生を約束する。姫君は阿弥陀来迎を凶様^{まんだら}にして曼荼羅を織り、予言通り往生を遂げる。継子物や当麻寺伝説をもとにした霊験譚。

参考展示

版本、20巻、34冊。縹^{はなだいり}色地黄色草花文様表紙。縦14・6cm、横24・6cm。表紙中央に朱色地銀切箔散らし刷題簽^{すりだいせん}を貼付。「はちかつき」3冊、「小町さうし」2冊、「御さうし嶋わたり」2冊、「からいとさうし」2冊、「こわたきつね」2冊、「七くささうし」2冊、「さるけんし」2冊、「ものくさ太郎」2冊、「さゝれ石」1冊、「はまくり草紙」2冊、「小あつもり」2冊、「二十四孝」2冊、「ほんてん国」3冊、「のせさる」1冊、「ねこの草紙」1冊、「はまいて草紙」1冊、「[一寸ほうし]」1冊、「さかき草紙」1冊、「よこふえ」1冊、「しゆてんとうし」2冊。袋綴。横本。一面13行書き。(図書館黒川文庫)



12 奈良絵本「さごろも」

絵入り3冊、列帖装。縦23・6cm、横17・6cm。紺地菱繫ぎ菊花文様布表紙。表紙中央に金泥雲水文様の紙題簽「さごろも 上(中・下)」と墨書する。一面10行書き。奥書に「居初氏女書画」とある。「居初氏女」は「居初つな(津奈とも書く)」、貞享・元禄年間に活躍した絵本・絵巻作者で、『女今川』(貞享4年1687、菊屋七郎兵衛版)をはじめとして『女実語教・女童子教』(元禄8年1695、文台屋治良兵衛版)にいたるまで、女訓物、往来物の作者としても活躍した人物。本学文芸資料研究所



蔵『伊勢物語の哥絵』にも同じ筆者の奥書があり、奈良絵本の筆者が判明する、きわめて稀少な例。

「さごろも」は王朝物語『狭衣物語』のなかから狭衣中将と飛鳥井の君との悲恋物語を「転生」させ、ハッピーエンドに結ぶ作品。『狭衣物語』は『源氏物語』に次いで成立した平安後期の代表的物語のひとつ。

(図書館常磐松文庫)

11



四、夢の浮橋饗宴 きょうえん

「夢の浮橋」とは、いうまでもなく『源氏物語』54番目、つまり最終巻の名です。物語全体をもう一度ふり返るのに適した場でもあり、なおかつ、いったんここで『源氏物語』は閉じられはしますが、物語によって刺激された思いが勢いを得て、あらたな創作へ向けて解き放たれる場でもあるのです。いわば「転生」へのスタートラインなのです。

鎌倉時代の歌人・藤原定家が「春の夜の夢の浮橋とだえして峯にわかる横雲の空」（『新古今集』）と詠じたのも『源氏物語』の印象を和歌の世界に「転生」させたものでした。また、巻名をそっくり作品名とした谷崎潤一郎の小説『夢の浮橋』があり、さらに『源氏』と谷崎作品両方のオマージュ（称賛し追隨する作品）として書かれた倉橋由美子の小説『夢の浮橋』があります。

『源氏物語』以後、物語はさまざまな世界・分野に「転生」してゆきます。絵画・服飾・工芸・演劇・香道・華道……。数えあげていったらきりがありません。すべてを概観することも困難です。ここではそのごく一端を紹介するに留めておきたいと思いますが、それでも、ずいぶん範囲がひろい、すなわちそれは『源氏物語』の裾野の広さを示すもの、と察していただけるのではないのでしょうか。

13 新古今和歌集（伝邦高親王筆本）

写本、2冊。列帖装。縦22・6cm、横17・8cm。
一面11行書き。「伏見殿邦高親王御筆」の極札を付す。邦高親王（1456-1532）は伏見宮第5代。後崇光院（貞成親王）の孫。三条西実隆と親交があった。
(図書館常磐松文庫)

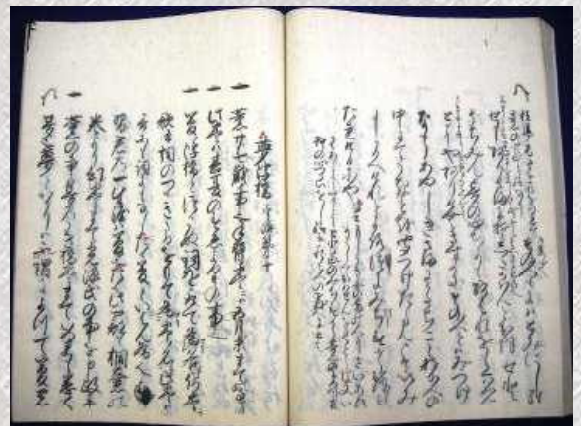
13



14 湖月抄

版本、60冊。袋綴。縦28・3cm、横19・8cm。
北村季吟（1624-1705）の撰による、江戸時代の『源氏物語』注釈書。「発端」「表白」「雲隠」（後人による源氏物語続篇）「系図」の各1冊と「年立」2冊に物語54帖各巻1冊で構成する。室町時代の注釈を集大成し、本文と頭注形式で読みやすく、近現代まで読み継がれたロングセラーとなった。
(文芸資料研究所)

15



14



15 源氏物語聞書 覚勝院抄

写本、24冊。袋綴。縦26・8cm、横19・6cm。黄檜色地亀甲唐草空押文様表紙。表紙中央に題簽あり、「源氏物語抄（巻名）」と墨書する。室町後期に成立した『源氏物語』注釈書。京都大覚寺の塔頭・覚勝院に所縁がある。物語本文を適宜段落に分段し、

初期稿本系・流布通行本系・後期増補本系の3種あるが、当該本は膨大な書き入れ注を有する点で特徴があり、後期増補本系に属する。
(図書館常磐松文庫)

16



16 源氏小鏡（明暦三年版）

版本、大本3冊。袋綴。縦27・0cm、横20・0cm。江戸時代・明暦3年（1657）刊・安田十兵衛版。縹色空押文様表紙。表紙中央に刷題簽。料紙は楮紙。『源氏物語』梗概書。各巻に挿絵1図。

他の絵入り版本が半丁、もしくは見開きに絵を挿入するのに対し、明暦版は脇に寄せて、匡郭の外に2-3行ほどの本文があったり、画面上方の霞の部分に匡郭を割り込ませて本文を書き入れたりする異例の形態をとる。
(文芸資料研究所)

17 現代のさまざまな「源氏物語」

谷崎潤一郎は『源氏物語』現代語訳を3回も試みたことで知られるが、『夢の浮橋』は舞台を現代に移した「転生」作品。倉橋由美子も同名の小説を書いている。『源氏物語』の翻案ではないが、遠く関連する作品である。この他にも、田辺聖子『新源氏物語』『私本・源氏物語』、丸谷才一『輝く日の宮』、また推理小説の類にも『源氏物語』に材をとったものが膨大にある。香道の「源氏香」もよく知られるが、物語にコラボレーションした生け花、果てはカクテルの名に至るまで、あらゆるところに『源氏物語』が「転生」しているのが現代である。
(個人蔵)



源氏物語の転生
 展示解説
 2011年10月3日(月)～23日(日)
 実践女子大学香雪記念館展示室
 主催:実践女子大学文芸資料研究所
 〒191-8510日野市大坂上4-1-1

